

特集
旅立ちへの想い
 ～研究と教育の日々を振り返って～

退任する教員からのメッセージ

人文社会・教育科学系(教育学部)教授 p12 橋本 修

人文社会・教育科学系(経済学部)教授 p12 小山洋司

自然科学系(理学部)教授 p13 大矢 進

自然科学系(理学部)教授 p13 関川浩永

自然科学系(理学部)教授 p14 檀上篤徳

医歯学系(医学部)教授 p14 尾崎フサ子

自然科学系(工学部)教授 p15 合田正毅

自然科学系(工学部)教授 p15 長谷川富市

自然科学系(農学部)教授 p16 新美芳二

自然科学系(農学部)教授 p17 竹内公男

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授 p17 木下勝一

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授 p18 鈴木佳秀

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 p18 大橋 修

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授 p19 田村 詔生

医歯学系(大学院医歯学総合研究科)教授 p19 山本正治



**新潟大学を
退任するにあたっての思い**

人文社会・教育科学系(教育学部)教授

橋本 修 HASHIMOTO, Osamu

1973年(昭和48年)、新潟大学に着任して以来、退職まで36年間お世話になったことになる。

教養部に21年間、教育学部に15年間勤務し、人生の大半を新潟大学で過ごしたことになると思うと感慨無量なものがある。この間、1998年(平成10年)には、教育学部が改組され、新課程の健康スポーツ科学課程を担当することになり、今年で8回生の卒業生を送り出すことになった。教養教育、専門教育・研究に多忙感を増しながらも得がたい経験をさせて頂いた。このように長くもいれば、新潟大学の大きな変革のいくつかの節目に遭遇し、その都度苦悶しながらも無事に終えることを深謝したい。

また、課外活動では、ラグビー部の部長及び監督として36年



第59回全国地区対抗大学ラグビー大会出場(平成21年1月6日)。

間学生とお付き合いさせて頂いたことは望外の喜びでもあった。この間、練習環境整備や指導方法などに腐心しながら毎年学生達と切磋琢磨したこともあって、全国地区対抗大学ラグビー大会へは13回の関東地区代表となり、3回の準優勝という結果を残せた。歴代の学生達と現在まで至る親交は、私にとっては換えがたい財産となっている。今後とも新潟大学の益々のご発展を祈念申し上げます。



**新潟大学を退任するに
あたっての思い(最後の憎まれ口)**

人文社会・教育科学系(経済学部)教授

小山洋司 KOYAMA, YOJI

1982年4月から27年間、新潟大学で楽しく働くことができました。この機会に皆さんに感謝申し上げます。退任するにあたって、最後に憎まれ口をさくのをお許し願いたい。

自然科学の世界では、学術論文を(主に)英語で書くのは当たり前のことになっているようだ。新潟大学全体を見渡すと、外国へ調査や国際会議のために出かけるのは理科系の教員が圧倒的に多い。文科系の教員の海外渡航は少ないし、英語での論文執筆も少ない。これは何も新潟大学に限らず、全国的な特徴であるように思う。

私が研究対象としている東欧には小国が多い。たとえば、旧ユーゴを構成したスロヴェニアは人口200万人で、新潟県より小

さいにもかかわらず、現在はEU加盟国であり、2008年の前半はEU議長国の役割も見事に果たした。この国では、文科系の学者は年間に執筆する論文の半分以上は英語で執筆する。彼らは国内の学会よりも最初から国際会議で発表することをめざす。これは学者に限らず、ビジネスでも同様であり、世界市場、とりあえずはEU市場を相手にしなければ、企業は生き残ることができない。だから、いきおい自身の活動を国際化することになる。

それに対して、日本は中途半端に大きな国内市場を持っている。

文科系の学問ではどの分野でも相当な数の同業者がいるので、国内の学会や読者を相手にしていればすむので、英語で書かなければという強い動機が働かないが、はたしてこのままでよいのだろうか。



アルバータ大学サマーセミナーに参加する学生を引率したときの一コマ。カナダ、ルイーズ湖にて1994年8月(2列目中央が本人)。



大学を振り返る

自然科学系(理学部)教授

大矢 進 OHYA,Susumu

新潟大学には34年間、大変お世話になりました。大学は海あり、山ありの自然の中で、学究的精神を育むところでは大変よいところでもあります。悩んだときには海を歩き、魚釣りに興じ、また移り行く佐渡、弥彦、角田山の情景をみて、また新たな感動を受けました。“本当に困ったときは深呼吸を3回しなさい、そしてこれがあとの人生で一番面白いことになるのだ”とよく学生に言いました。

私の専門は原子核の実験的研究でありまして、極低温(～8mK)で原子核のスピンを整列させ、核磁気共鳴で原子核の電磁モーメントの測定と、核を用いた物性の基礎研究を行ってきました。特に極低温で原子核のスピンを整列させる方法は日



長年の共同研究者のStone教授ご夫妻と大坪准教授、極低温核整列装置の前で。

本ではほとんど初めてであり、その成功は後の研究を大きく発展させました。研究でオックスフォードのクラレンドン研究所に1年半ほど滞在して研究を行ってきました。そこで多くの外国の研究者と交流、共同研究を行い、その後の研究に弾みをつけました。いまの大学には昔のおおらかな、よく学び、よく遊ぶ面が消えてしまったように思える。直線的な効率を重んじ、管理された教育、研究が主流になったようだ。朝永先生の言葉ではないが「本当に研究したいのは別なことだが、このテーマだとお金をくれるのでこの研究をしている」様な発想が当然ようになってきた。本当に勉強したい人が学費のことなど考えなく大学に入り、本当に研究したいことをやっていけることを願っております。



退官にあたって

自然科学系(理学部)教授

関川浩永 SEKIGAWA,Kouei

昭和44年4月、本学理学部数学科助手として採用されました。当時は全国的に大学紛争の嵐が吹き荒れておりました。本学は移転問題で紛争中で、私は着任早々この紛争に巻き込まれてしまいました。大変な時期ではありましたが、当時の学生はとてエネルギーに満ちていたように思います。私の研究分野は微分幾何学(リーマン幾何学)で、研究活動を通して国内外の多くの人達との出会いがありました。一年先輩には故高木齊東北大教授、一年後輩には渡辺義之富山大教授。高木さんは先輩であると同時に研究上でのよきライバルでもありました。学外では、当時東北大学助教授でありました故丹野修吉東工大教授にリーマン幾何学の基礎について懇切丁寧に教えていた

できました。海外ではカトリック大学(ベルギー)のバンヘッケ教授との共同研究、ブルガリア科学アカデミーのデミエフ教授との国際研究集会の共催活動(平成4年より1年おきにブルガリアで開催、昨年で9回目)が特に印象に残っています。また教育面では、私の講義は非常に不評だったにもかかわらず、私のセミナーは多くのすばらしい学生さんに恵まれました。卒業後は社会の様々な分野で活躍いたしております。

私のようなわがままで未熟なものがこれまで大過なく過させていただきましたのもすべて数学教室はじめ理学部の皆様方の温かいご理解とご支援の賜物と深く感謝いたしております。40年もの長き間、本当にありがとうございました。



白墨を置くにあたって

自然科学系(理学部)教授

檀上篤徳 DANJO,Atsunori

1972年2月新潟大学理学部にまいりました。物理学科の超高層原子分子グループです。博士課程を修了しても、学位は取っておらず、定職もないありさまでしたので、1971年4月から、インドとの共同研究に参加して宇宙ガンマ線を観測していました。

原子分子グループでの仕事は、大学院時代のそれとはまったく異なり、別世界にきた思いでした。やっとデータが取れるようになるまで、数年が経ちましたが、装置作りに悪戦苦闘したのは、今では良い思い出です。

1994年教養部改組に伴い自然環境科学科が誕生しましたが、改組計画が議論されている1993年には、英国にいました。帰ってきて、新学科の教員名簿の中に私の名前を見つけたとき



情報・理工棟の中庭にて。

は、少し戸惑いましたが、学科を替わることへの抵抗はありませんでした。

多くの学部学生や大学院生と一緒に勉強してきました。新潟大学でも、また学外の共同研究においても非常に楽しい37年でした。ご支援くださいました多くの方々に感謝申し上げます。最後に新潟大学の益々の発展をお祈りいたします。



カナダ・スタディツアーの思い出

医歯学系(医学部)教授

尾崎フサ子 OZAKI,Fusako

新潟大学には平成5年に赴任しました。

15年間でいろいろ思い出があります。その一つがカナダ・スタディツアーです。保健学科では“外国の文化、医療、学生生活にふれ国際的視野を広げ専門職としてのあり方を学ぶ”を海外研修の目的の1つに掲げています。今まで、古くは1980年韓国のチョンジュ、その後はラトローブ大学(オーストラリア)(2003)、ビエンチャンにおける医療事情(ラオス)(2005)、モホーク・カレッジ・マクマスター大学訪問(別名カナダ・スタディツアー)(2007、2008)と続いています。

今年の卒業研究を担当したA学生は2年次に参加したときの講義「Bridging Program」(橋渡しとなるプログラム)を覚え

ていて、日本におけるインドネシア人看護師の受け入れプログラムとオンタリオ州(カナダ)のプログラムを比較検討しました。課題には以下があがりました:ケアを受ける患者、ケアを提供する外国人看護師、受け入れ職員のインタビューおよびアンケートを使用して、より適切な日本におけるプログラムを目指す。

私は、A学生が講義内容をしっかりキャッチしていて、現在起きている日本の医療事情と結びつけたことに感激したのでした。そして、学生にはさまざまなチャンスを提供することの重要性を感じました。

新潟大学のますますのご発展を祈念いたします。



講師と一緒に、モホークカレッジにて。2007年3月。



無我夢中の36年

自然科学系(工学部)教授

合田正毅 GODA, Masaki

30年間北海道しか知らなかった若輩が、長岡市の旧新潟大学工学部に新米教員として着任したのは昭和48年(1973年)の4月でした。共通講座に所属し、全学生を対象に物理の教育を担当しました。7年後工学部は現在の五十嵐キャンパスに統合移転し、その後大学院自然科学研究科が創設され、ようやく本格的に学生を指導出来ることになりました。共通講座は、教養部改組に伴い新設機能材料工学科の一部に改組され、現在に至ります。

その間、長岡の雪の深さと人情の温かさ、新潟移転、移転後の共通講座への風の冷たさ、自然科学研究科での新鮮な人間関係、学科の設立と運営の大変さ、マゲダブルグ大学との



マゲダブルグ大学との第1回夏の学校(1996年新潟)。今年は第13回がドイツで開催される。

国際交流への道の開拓、いわゆる物性拠点計画の策定への関与、「授業評価」とは異なる「授業実態・効果アンケート調査」の立案と解析、日本学術会議や日本物理学会の物理教育委員会などで理科教育問題の解決に向け知恵を絞ったこと、最後になったが研究室やテニス部での学生諸君との熱いやりと、などが思い出されます。私の授業と指導は学生諸君にどの程度の影響を与え得たのであろうか。

今は法人化の波をかぶり、大学の生き様も変わり大変ですが、新潟大学が皮相に惑わされずに大きく発展してゆかれることを念じております。



新潟大学を 退任するにあたって

自然科学系(工学部)教授

長谷川富市 HASEGAWA, Tomiichi

私は本学工学部機械工学科を1966年に卒業しその後大学院・助手の7年間を東京工大で過ごし1973年4月に新潟大学に着任いたしました。東工大時代に続き本学でも非ニュートン流体の研究を行うことにしました。この分野は、自作装置で実験が出来るのが魅力で研究環境のよくない所でも十分研究が出来ると思ったからです。先ず希薄高分子溶液の流動に伴う弾性を精確に測定すべく実験室の高さ7mの天井梁を利用する大きな装置を作りました。これによれば、希薄高分子溶液のみならず溶媒である水にも小さいながら弾性らしきものが測定されました。これは面白いと言うことでその実験を続けることにしましたが、これが結局ライフワークになりました。言い換えれば一生



研究室にトロント大学のジェームス教授を招いた際に撮ったもの。

やらねばならないほど難しいテーマに取り組むことになったのです。これでは業績が上がらないため、高分子溶液、洗濯洗浄、動的表面張力、複雑流体、工業上の問題、等を流体工学的視点で研究いたしました。今でも水の高伸張流には弾性が生じると主張していますが、十人に一人位しか認めてもらえません。それでも本学で教鞭をとり学生諸子と共に研究できたことを幸せに思っています。新潟大学の皆様に感謝申し上げますと共にご多幸を祈ります。



去りゆく(老)教師から 若者へのメッセージ

自然科学系(農学部)教授

新美芳二 NIIMI, Yoshiji

「新潟大学での38年間の教員生活は如何でしたか?」、「本当に楽しかった。」「どうしてですか?」「それは20歳前後の若者にいつも囲まれ、生活ができたからです」と答えます。そしていつも新しい「出会い」があるからです。「出会い」といえば、私が助手として着任した頃、福島・会津出身の学生が「先生、きれいなユリが会津にあります。一緒に見に行きましょう。」と誘ってくれました。その学生との「出会い」、ヒメサユリとの「出会い」がこの大学での私の研究生生活の方向を決めることになりました。大学教員は、若者、それも未来に胸を膨らます若者といつも語ることができ、日常生活を共に過ごすことが出来るから楽しい。楽しい大学生活を過ごすために、若者は耳からイヤフォンをはずし、友達や先生と積極的に話をしましょう。

大学教員は教育、研究、管理運営に関わります。それに最近では社会貢献という課題もあります。とはいえ、大学はなんといっても教育機関であり、学生はお客様です。お客様に満足していただくことが出来なければ、その大学は衰退し、やがては消滅します。「この大学に来てよかった」と満足してもらうために、教員や職員は協力して、努力しています。さまざまな理由から出来ることと出来ないことがあります。改善してほしいことや希望を大学に遠慮なく要求すべきです。黙っていても相手に伝わりません。要求するからには責任も生じます。自分たちもいつまでも「お客様」とし



09年1月に、マレーシアで行われた、第1回農学系学部学生国際シンポジウムに参加したUniversiti Putra Malaysiaの学生達に囲まれて。

てではなく、教員や職員と一緒に楽しく学べる大学づくりに参加しましょう。学生、教員と職員の三者がうまく機能してこそ魅力ある大学となります。今年1月、農学部学生3名に同行して、マレーシアで開催された第1回農学系学部学生国際シンポジウムに参加しました。学部学生によってすべて準備されたこのシンポジウムは「素晴らしい」の一言です。会議の中での積極的な発言にたくましさを感じ、文化や考え方の違い、さらには母国語でないにもかかわらず彼らの英語能力の素晴らしさを再認識する機会となりました。これからの若者は国際舞台で活躍する、しなければならない機会が多くあるでしょう。そのためには、専門分野ばかりでなく幅広い勉強が必要であり、英語能力向上に努めることが大切であると思います。新潟大学が教育・研究の場として益々発展することを祈っています。



感謝し、期待して、お別れを

自然科学系(農学部)教授

竹内公男 TAKEUCHI, Kimio

昭和55年7月に農学部へ赴任して以来、自然科学研究科設立、学部改組、国立大学法人化という大きな変化を体験しました。大学を巡る急激な変化に付いていくのが精一杯であった教員生活をここまで続けられたのは、教職員皆様のお力添えと研究室卒業生諸君のご協力の賜物と感謝するばかりです。

私の研究対象である森林は半ば自然任せで悠長な存在であることが本質ですが、今の日本の森林は戦争末期以降の約30年間の激動の時代にその姿を人工的に変えられた結果といえます。現在の森林の姿については批判的見解が優勢ですが、時の勢いに流されずに遠い将来の森林の姿を見通すのはなかなか難しいことです。それでもなお、今の森林を適切に管

理しながら、将来の望ましい姿に変えていくことが林学者の課題であり、今後もその努力を続けていきたいと思えます。

私が助手になった頃の大学は本来の森林のように悠長な存在でしたが、今は激動期の森林のように1年先の姿さえ不透明な変化の渦中にあります。大学の教育と研究には社会の将来を見通す視野が必要です。混沌とした状況の先に何かがあるかを予測することは難しいことと思いますが、皆様方が叡智を集めて難局を乗り切れ、新潟大学がさらに輝く日の来ことを期待します。長い間、本当にお世話になりました。



新潟大学を 退任するにあたっての思い

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授

木下勝一 KINOSHITA, Katsuiichi

新潟大学に40年間お世話になりました。この間を振り返りますと、大きな節目ごとに大学改革という言葉が思い浮かびます。最初に赴任した40年前は、全国で大学紛争が吹き荒れておりましたが、新潟大学を再建するという改革運動がありました。また、その後もさまざまな大学改革が展開され、わたくし自身が直接かかわった改革としては、教養部・商業短期大学部の廃止転換がつよく印象に残っております。わたくしの所属しておりました経済学部も、この教養部・商業短期大学部の廃止転換にともなって規模の拡大がはかれ、教育研究環境が以前にくらべて飛躍的に充実した学部へ発展することができました。

しかし、今思いますと、数多く経験してきました大学改革が時



ゼミ合宿研修でのキャンプファイヤーの一コマ。

代の流れに沿ったものではありませんが、かならずしも、事後の十分な点検・総括を経たうえでの改革であったかどうかということに疑問は残っております。とくに、国立大学の独法化という大学改革がこれまで経験したことのない「集中と選択」の未知の領域に入っているいま、この思いをつよくしております。

新潟大学が国立大学法人として第2期の時代に入る年に退職いたしますが、未曾有の危機の時代を乗り越えて、いっその発展を遂げていきますよう祈念申し上げます。



卒業・退任

人文社会・教育科学系(大学院現代社会文化研究科)教授

鈴木佳秀 SUZUKI, Yoshihide

実質的に研究生生活が始まったのは、昭和57年4月からであった。新潟大学教養部に歴史学の講師として就任し、古代オリエント史を講ずることとなった。アメリカでPh.D.(旧約聖書学)を受け取った。カリフォルニア州で就職の手続きに入っていた時に、航空便で、新潟大学で教員を求めているが赴任する気持ちはあるか、との文字が目飛び込んできた。時間を考えず、その場で国際電話を入れ「帰ります」と叫んだのを思い出す。当時の教養部は自由な雰囲気が保たれていた。専門をそのまま教えるのではなく、学生たちの目線にあわせ平明な語り口で歴史の講義をするなら何を素材にして教えてもいい、専門を語ってもいいと言われた。宗教、神話、政治史、法制史に関する講義



荒川学長に随行し、ブリストル大学との交流協定に調印したときのスナップ(左から2人目が本人)。

ノートを10数種類も用意したが、それらがその後の研究動向を決める契機となった。教養部は平成6年に解体されたが、この時までに蓄積したことがその後の論文や著作に繋がった。人文学部に移ってからは卒論指導が加わった。教養部時代から続けていた自主ゼミを、卒論準備ゼミと呼び変えて学生たちとの学びの場を維持したが、それも楽しい思い出となった。新潟大学で得た経験を、第二の職場で活かしたい。



新潟大学を 退任するにあたっての思い

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授

大橋 修 OHASHI, Osamu

科学技術庁金属材料技術研究所で30年間、そして新潟大学で13年間。43年間にわたり、材料の加工、一貫して「接合」に関わる研究に携わることが出来たことは、非常に幸せであったと思う。

新潟大学赴任当初は、研究資金や実験室等で非常に悩んだが、研究予算にも恵まれ、また総合研究棟の新築もあって、大学で多くの研究成果をあげることが出来た。

これらの成果は、13年間に、学部生34人、博士前期課程28人、博士後期課程11人の学生の成果の賜でもある。振り返ってみると、助手と一緒に(7年間)に仕事が出来た時が、研究室のアクティビティが最も高かったように思う。



卒業生とともに。

何も知らない学生に対して、「如何に研究の動機付けをして、そして研究に興味を抱かせるか」が重要であり、一番腐心したこともある。

昨年末に大学発のベンチャー企業(株)WELLBONDを設立した。接合について、「基礎的な研究」から「ものづくりを目指した研究」を通して、多くの知見を得た。今までに、培った接合に関わるノウハウを生かし、良い(WELL)接合(BOND)を目指す各種情報の提供とコンサルティングを通して、これから社会に貢献できればと考えている。



新潟大学を去るにあたって

自然科学系(大学院自然科学研究科)教授

田村 詔生 TAMURA, Norio

平成8年に本学に赴任して以来、早くも13年経ち、美しい並木、春の桜と秋の紅葉に代表される自然豊かな環境と、諸先輩、同僚、若い人たちのおかげで、この度無事定年退職を迎えました。この機会に、お礼を申し上げます。

現在世界及び日本には、深刻な問題が山積していますが、このようなことは歴史的にしばしばあることで、夜の後には朝が来ると信じています。「朝」を迎える為に最も重要な要素は、特に天然資源が少ない日本にとって、また知的活動を主たる役割とする新潟大学にとっては、高い志を持つ「人」であると思います。しかし、高い志の実現には、易きに流れない心がけと努力が必要であります。特に若い人たちに、一言申し上げたいと思

います。総合大学である新潟大学で、広い範囲の多くの人々との交流の中で、多いに、見て、聞いて、読んで、会話して高い志を得、経験して、学んで、研究して、その実現を図って下さい。

つい先日アメリカには、オバマ大統領が誕生しました。また嬉しいことに、去年は4人の日本人がノーベル賞を受賞されました。これらの何れの方々にも共通することは、決して、自分の能力や情熱を注ぐ対象を、ある「自分の能力や環境による限界」を設定しその中に押し込めようとされなかったということだと思います。高志の国の新潟大学が志高い人の集団として、世の中に一層重きをなす様に発展することを、大学の外から御祈りしております。



新潟大学を退任するにあたっての思い

医歯学系(大学院医歯学総合研究科(医))

山本 正治 YAMAMOTO, Masaharu

学生として6年教員として41年、合わせて47年間新潟大学にお世話になりました。半世紀にわたる思いを一言で述べるとすれば「私をここまで育ててくれた新潟大学への感謝」です。昭和39年の新潟地震の中での解剖学骨学実習や、昭和43年のインターン制度廃止の為の卒業試験ボイコット運動等、どんなに大変な時にも教職員の方々は見守ってくれました。教員になってからも、農薬の環境汚染に関する私の研究で社会が騒然とする中、成り行きを見守ってくれました。いつも私の背中をそっと前に押してくれたのが新潟大学でした。

感謝の気持ちとしてアメリカ・ロシア・中国との医学生交流、チリ・ハンガリーとの国際共同研究等、あらゆる機会を捉えて新潟

大学のすばらしさを世界に向けて情報発信をしてきました。そのモットーは逆転の発想としてThink locally, act globally.でした。言い尽くせない私の思いは『どうなる日本の医学・医療ーグローバル化を体感した医学研究者の随想』(新潟日報事業社)としてまとめました。最後に「新潟大学は日本のトップ10、世界のトップ100をめざす」ことがアクションプランに明記されましたが、この目標達成の一方略として、教職員が一丸となり本学のすばらしさを世界に向け情報発信することを期待しています。



「ミネソタナイト in ニイガタ」(ミネソタ大学医学部長デボラ・パウエル(写真中央女性)一行が来日。歓迎会で万代太鼓の皆さんと記念撮影。2005年11月)

第57回 卒業制作展

●2009年2月3日~8日

●新潟県民会館3階アートギャラリーA

~ 57 t h S O T S U T E N ~

大学院教育学研究科教科教育専攻美術教育専修の修了生と、教育人間科学部芸術環境創造課程造形表現コースと学校教育課程美術専修の卒業生による卒業制作展が開催されました。大学での経験を通じた自分の成長の証ともいえる作品の数々。訪れた方々は、その作品が語りかけるメッセージに耳を傾けるように鑑賞されていました。



view

眞島 圓 [洋画]

■制作意図

異常な人工物の集積とその中にあるもの。その表面上の光り、輝く眺めを描こうと思いました。

■苦労した点

画面のサイズに慣れるまで時間がかかりました。



憧憬

大橋 知世 [洋画]

■制作意図・及び作品のコンセプト・テーマについて

以前から人体の筋や肌の表情による形の力強さや美しさが好きでした。また、感情などを表現するような身体表現を見るうちに、人間の内面へと興味をもちました。そこで卒業制作では、人間の持つ性質を2つに分け、人体という題材を用いてある種の偶像のように表現してみたいと思い、この作品を制作しました。左の人物を理想的、理性的である個性の曖昧さの象徴として、右の人物を本能的、利己的、その醜悪さと愛しさの象徴のように描きました。二面性。それから他者と自分と。2体の人物の存在とその間の曖昧な距離を感じてもらえるような作品になれば、と思いながら制作しました。

■苦労した点

人体の形を描くにあたって、連なりや奥行きを表現するために筋肉や骨格など構造を調べました。また、コンセプトから一對の作品にしようと思っていたのでそれぞれの人体のポーズと画面への収め方には苦労しました。